松本昌次著

ある編集者の作業日誌

EDITORS LIBRARY

日本エディタースクール出版部

ある編集者の作業日誌

松 本 昌 次 著

【エディター叢書】

日本エディタースクール出版部

松本昌次（まつもとまさつぐ）
1927年東京都に生まれる．1952年東北大学文学部卒業．高校講師等を経て，1953年未来社入社，現在同社取締役編集長．この間，花田清輝，埴谷雄高，野間宏をはじめとする多くの評論集，作品集，論文集などを手がける．著書に『朝鮮の旅』（すずさわ書店）．

ある編集者の作業日誌　　エディター叢書19

昭和54年2月20日　発行

¥1600

著者　松本昌次

発行者　吉田公彦

発行所　日本エディタースクール出版部
東京都新宿区市ケ谷田町1-6
電話　東京(03)260-5891(代)

© 松本昌次 1979

精興社印刷・松岳社製本

まえがき

「ある編集者の作業日誌」などという表題は、羊頭をかかげて狗肉を売るそしりをまぬがれ得まい。いくら『ブレヒト作業日誌』(全四巻、河出書房新社)にあやかりたいと思っても、残念ながらケタがちがう。従って、ブレヒトに変らぬ敬意を捧げている一人の無名の編集者が、その表題だけを勝手にチョロマカした本と考えてもらうほかはない。しかも、ここに蒐めた小さな、機会あるたびに、ちぎっては投げ、ちぎっては投げした文章群は、どれをとっても、編集者にとって必要な、役に立つ「作業」のあれこれについて書いたものではなく、いわば、一個の編集者が、同時代のものごとやひとや本や仕事などとどうかかわったかの、ささやかなドキュメント、またはフラグメントといったたぐいのものばかりである。かかわられたそれぞれは、決してささやかではないが、かかわった側の力量不足がそういう結果を招いたのである。

たとえ狗肉でも、いくらかでもうまく見せるために工夫をこらし、全体を大きく三つに分け、Ⅰには、一種のコラム的文章ばかりを集めた。書名に使った「ある編集者の作業日誌」は、二年ほど前、私財を投じて厖大な日本の出版物の目録・案内を作成しようと試みたK氏の心意気に共感し、その不定期刊の小冊子に応援のつもりで連載したものだが、雑誌がつぶれるとともに終った。まこ

とに中途半端だが、〆切日に追われなくなったので、あとはとてもつづける気がしなくなった。「末尾ながら……」は、わたしの勤務する未来社の月刊誌『未来』に(M・M)の署名で書いた〝編集後記〟で、一九七六年五月からの二年間分である。〝編集後記〟とはいっても、その役割には不忠実に、わたしの他に対するさまざまな関心のあり方を書きつけたものである。この欄はいまも『未来』でつづいているが、一応、二年間で一区切りとした。おのおのの小見出しは、本書を編むにあたってつけた。「それぞれのかかわり」も、発表場所は異なれ、似たり寄ったりの「コラム的文章」にふさわしい小さな文章ばかりである。発表当時、匿名だったものもある。

Ⅱの「著者たち」は、その折り折りの注文に応じて、主として編集者としての立場から著者たちについて書いた文章を集めた。集めてみて〝追悼文〟が多いのに、今更のように時代のうつりかわりを感じないわけにはいかなかった。しばらく前までのある期間、ペン・ネームを使っていくつかの駄文をモノしたことがある。それらは原則として本書からはぶいたが、著者に関するものに限って、例外的にそれらのなかから二、三の文章を収めた。Ⅲの「出版の現場から」には、出版界について発言したものを選んでみた。韓国で反朴運動に挺身する人びとについて書いた「暗夜に光る無数の星たち」も、ジャーナリストの責任に言及しているのでここに収めた。全体にわたって、朝鮮及び朝鮮人についての発言が多いのは、わたしの生き方による。また、表現上のいくつかの重複など、気になる部分もないわけではないが、最小限の訂正にとどめ、ほとんど初稿発表時のままとし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

た。＊印のついた註記は、本書で新たに付した。

さて、一冊の本の刊行をすすめられはしたものの、果たしてモノになるものやらためらいつつ、なんとかしようとアレコレわたしなりに工夫し努力した。しかし、日本エディタースクール出版部の編集部は、さすがにごまかされず、このままではいくらなんでもサマにならないから、これらの文章群をつらぬく編集者としての立場を明らかにした何かを書けというお達しである。もっともである。そこで、わたしの乏しい〝編集者経験〟の上に立って、その何かを書くべく悪戦苦闘したが、結局、ものにならなかった。そういうことを書くことが何ともテレ臭いのである。編集部及び読者の方々には申しわけないが、できれば、ここに蒐めた雑文のなかのあちこちに散在するわたしなりの編集者としての考え方を読みとっていただくほかはない。かわりにといってはおかしいが、「あとがき」に、わたしが編集者になったイキサツと、その何かの若干を書いた。逆に、この末尾の文章から読んでいただいてもいいかも知れない。なにはともあれ、編集者としては相も変らず駈けだしだし、とてもえらそうなことを言えたガラではないので、ある小さな出版社の一人の編集者の現在の心覚えとして読んで下されば幸いである。

以上が、本書の成り立ちの弁解と経緯のあらましである。

一九七八年十月

松本昌次

目　次

まえがき……i

I　ある編集者の作業日誌

ある編集者の作業日誌……三

岩淵達治他訳『ブレヒト作業日誌』・森崎和江著『からゆきさん』／田中克彦著『言語の思想』ほか・一条ふみ著『淡き綿飴のために』／竹内好訳『魯迅文集』・真尾悦子著『土と女』／野川記枝著『行旅死亡人』・埴谷雄高著『戦後の文学者たち』・高橋たか子著『高橋和巳の思い出』

末尾ながら……一六

鄭敬謨著『韓国民衆と日本』／尹潽善氏と「民主救国宣言」／文庫合戦と欲望過多／Iさんのこと／11PMの『韓国人原爆被爆者』／NHKの「体賀」／宇都宮徳馬氏と政治責任／TV『友だち一〇〇人できるかな』／「盛り合せ出版界」の現状／野川記枝著『行旅死亡人』／写真集『ベトナム解放戦争』／竹内好氏追悼／鄭敬謨「正義を貫徹しない「日本の知恵」について」／「学校がこ

わい……」／雑誌『地匍人』／「不知火海・巡海映画班」／尹潽善氏の公開書簡／金泰生著『骨片』／映画『サルトル――自身を語る』／TV『忘れられたファントム機墜落事故』／野呂重雄著『もろともにかがやく宇宙の塵』／李小仙「私の労働運動はこうして始まった」／TV『父さんの会社が……』／二つの葬儀／附〝『未来』10年

それぞれのかかわり ……六六

彼と彼との奇妙な友情／ある夜の出来事／ある医師の物語／なによりダメな日本人／ある投書から／あどけない空の話／新聞の片隅から／南廷賢『糞地』／ある朝鮮人の友への手紙

II 著者たち

花田清輝 『アヴァンギャルド芸術』出版の頃 ……九三

『ボレロ』のように――追悼 ……一〇一

コンモン・センスの探求 ……一〇六

花田さんが生きていた時 ……一一七

埴谷雄高 「贋造紙幣」流通の記 ……一二一

平野 謙 〝命運〟を担って――追悼 ……一三〇

椎名麟三 数分間のめぐりあわせ ……一三九

武田泰淳　『汝の母を！』――追悼……一四四
富士正晴　『竹内勝太郎の形成』の十年……一四七
関西の雄のおかしな話……一五〇
飯沢匡　チャップリンのように……一五五
「笑い」の批評精神……一五七
下村正夫　転形期のドラマチスト――追悼……一六三
岩村三千夫　心優しい革命家――追悼……一六八
井上光晴　虚実入り乱れて……一七二
酒の飲み方……一七六
上野英信　『天皇陛下萬歳』……一七九
金泰生　憤りと優しさの文学……一八四

Ⅲ　出版の現場から

読書、この贅沢な……一九一
ミニコミ人でありたい……一九五
単行本づくりへの偏好……一九八

消去の時代……二〇三
盛り合せ出版界……二〇六
出版における「大」の論理と「小」の論理……二〇九
「言論の自由」について……二一八
暗夜に光る無数の星たち……二二六
二つの著書からの感想……二三三
出版、この豊富のなかの貧困……二三六
あとがき……二四一
初出紙誌一覧……二五一
人名(作品名)索引……二六一

装本・藤森善貢

I

ある編集者の作業日誌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ある編集者の作業日誌

――日　岩淵達治他訳『ブレヒト作業日誌』

『ブレヒト作業日誌』(岩淵達治他訳、河出書房新社)の第一巻を読む。いや、読むというより、寝る前にどこのページでもいいから開いて、眠くなるまで見るのがこの頃の楽しみである。いや、楽しみというより、全四巻のうち既刊の一・二巻*を枕頭に置き、第二次世界大戦下、ナチス・ドイツから逃れた亡命中のブレヒトが、転々としながら一日一日をどんな「作業」に専心したかに感心し、鞭打たれるというべきだろう。そして、わが身の一日の「作業」が、それにひきくらべなんと情けないかにひそかに嘆息する。それならば、横たわっている寝床からガバとはね起き、再び机につけばいいものをと、もう一人のわたしが耳もとでささやくが、怠惰な肉体の願望に勝利することあたわず、やがてスヤスヤと眠りに落ちるというわけである。ブレヒト先生には申しわけないが、せめて先生のタイトルだけを頂き、〝作業日誌〟を書きつけたいと思う。

それにしても、「できるだけ私的(プライベート)なことを入れない」と宣言して書きつけられたこの『作業日誌』は、どこのページを開いても、ブレヒトの芸術創造上における戦闘精神に満ち溢れていておも

しろい。一九三八年七月の某日にはこうある。――「ルカーチの『マルクスとイデオロギー的退廃の問題』を読む。〈この先生〉ときたら、プロレタリアートによって一掃されたはずのあらゆる立場を、自己の立脚点としているのだ！　またぞろ例のリアリズムの話だ。国家社会主義が社会主義の名を貶しめたように、この先生たちはもののみごとにリアリズムの名を貶しめてしまった。」と。なかなかてきびしい。しかし考えてみれば、ブレヒトは、ブルジョア的思考や芸術理論と正面から対決しつつ、同時に、「またぞろ例のリアリズム」なるものとも、生涯をかけて闘ったといえる。いつの世においても、時代の先駆者というものは、かくのごとく腹背に敵を受けて進むものだ。二言目には〝形式主義〟とか〝反リアリズム〟とかいうレッテルをはって、リアリズムの多様な方法的発展を阻んだものへのブレヒトの批判的主張は、いまもなお教訓に満ちている。亡命という困難な立場にあっても、来るべき言葉の真の意味でのリアリズムを求め、しかも旺盛に創作活動をすすめたブレヒトの「作業」ぶりには、ただただ敬服のほかはない。

――日　**森崎和江著『からゆきさん』**

出版関係のある業界紙に、売られた喧嘩を買って出るみたいな論争的反駁文**を書いていたら、午前三時。明日の仕事もあるので寝ようと思うが、たまにこういう文章を書くと頭のほうがさっぱり眠ってくれない。読みかけていた森崎和江著『からゆきさん』(朝日新聞社)を読みつぐ。ところが内容にひきこまれ、眠るどころか目はますますさえ、外はすっかり明るくなる。それにしても、よく

もまあ、本を読むとなるとこうも寝ながらが多いのか、われながら読書態度の悪いのにあきれる。しかし編集稼業を長年やっていると、いつの間にか、至るところで読書する術を身につけるものだ。これは多忙な時間の谷間をいかに利用するかの知恵ともいうべきものだろう。電車の中や公園のベンチなどはむろんのこと、メシを食いながらテレビを見ながら、ついには用便をしながらということになる。いやはや、これでは雑学しか学べやしないと、またもわが身を嘆くばかり。

ところで、森崎和江氏については、これまでに読んだ本に関し、なんとなく、ひっかかりというかあるこだわりがあった。それは主として、彼女特有の〝文体〟に対する異和感だったような気がする。しかしこの『からゆきさん』では、対象に即した即物的なドキュメンタリー・タッチの文体が成功しており、深い感動を覚える。本当にわたしは、何も知らないで、多くの人びとの犠牲の上でよくものうのうと暮らしてきたなあと、つらい思いに貫かれる。読んでいると、明治二十六年刊の『南高来郡町村要覧』の資料にぶつかる。そこに島原地方の「窮民」「棄児」の数が記録されているが、島原地方は、ろくすっぽ米が食えず、粟か「コッパ」(切干藷)や甘藷が主食で、いわば〝からゆきさん〟の温床であった。「神代村、棄児八人」の一行で、わたしはハッとする。死んだ親爺の故郷だ。親爺は明治二十九年生まれだったから、ほぼこんな時代に生まれ育ったのだろう。親爺は、貧乏な小作の次男坊とはいえ、男だったから、辛うじて小学校四年を卒業し、東京に流れて倉庫会社の下積みの仕事を何十年もつとめ、わたしたちを育てることができたのだったろう。そうい

えば、わたしがもの心つくまで、わたしの家に本らしい本は一冊もなかった。当然のことだ。ふと、おふくろのために作った小さな仏壇(戸袋でかくしてある)の方に目をやり、一度として、親爺の位牌に合掌したことがないことを思う。

(76・7・30)

＊『プレヒト作業日誌』全四巻は、一九七六年四月に第一巻が刊行され一九七七年六月に完結。

＊＊ 誠志堂書店の小川芳宏氏との「出版時事」紙上での論争。論争文は一方的になるので本書には収録していない。

――日 田中克彦著『言語の思想』ほか

いわゆる「日本語ブーム」なるものがここ数年来、世をにぎわしてきた。その関係の本もよく売れているらしいが、わたしはなんとなくそれらの「ブーム」すべてを敬遠しがちであった。「日本語を愛する……」とか「美しい日本語……」などというキャッチフレーズに、ある種のアレルギー反応をおこすためである。しかし、田中克彦「恥の日本語」*(『展望』一九七六年九月号)には、深く教えられた。早速、昨年末に刊行され気になりながら読まずにいた、同氏著の『言語の思想』(NHKブックス)を買ってきて読みはじめたが、これは、「言語学」に関しまったくズブの素人であるわたしにはいささか手ごわい本で、毎日少しずつ教えられながら読む始末。田中氏が批判している丸谷才一氏の評判の『日本語のために』(新潮社)も、参考までに買ってきて読んだが、これはすぐ読める。そして、教科書批判の若干の部分をのぞいては、なるほど田中氏に批判されて当然と思える内容で

あった。これが二年間で「21刷」と奥付にある。驚くほかはない。『言語の思想』は売れているだろうか。

「口語文とはあくまで文語文のくずれ」と考える丸谷才一氏は、文章中心主義、標準語論者、方言否定であって、どの部分をとっても「書くことだけで生活をたてている人間の独善」と田中氏に批判されてしかるべき論調に満ちている。言語は、やはり、田中氏が言うとおり、「肉体の中に仕込まれたいわば一種の自動装置」であり肉体の一部であろう。書く以前に話すことがあり、文字を知らなくとも書かなくとも、多くの人びとはともに語りあい生活している。その一人一人の「母語」を大事にしないで、日本語浄化論をぶつのは、どうもわたしの生き方にそぐわない。「恥の日本語」の結びはこうなっている。――「思想にせよ芸術にせよ、規範言語には規範思想や規範芸術しか生み出せない。もし作家や思想家であって、なお、母語の話し手たちの言語的解放に共感する者があるとすれば、かれは、母語の語り手たちに対する社会的リンチに加わることをやめて、近代日本の標準語舗装道路の下に塗りこめられた、母語とその語り手たちの言語生活のことを思いやってみるべきであろう。」――まったく同感である。なにごとであれ、みずからの特権をそれとして意識せず、「美しい」だの「愛する」だのといった耳ざわりのいい言葉で「浄化」を意図する側には、わたしは今後も反対したいと思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook